慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨーロッパ労働運動史の研究状況： オーストリア国リンツにおける国際労働運動歴史家会議第7回大会に出席して
Sub Title	The tendencies of study on the history of European labour movement : a report of 7th conference of International Association of Historians of the Labour Movement at Linz
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1972
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.65, No.2/3 (1972. 3) ,p.192(110)- 199(117)
JaLC DOI	10.14991/001.19720301-0110
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19720301-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

ヨーロッパ労働運動史の研究状況

——オーストリア国リンツにおける 国際労働運動歴史家会議 第7回大会に出席して——

飯　田　　鼎

（1）　プロローグ
（2）　第1テーマ「1914年以後の大衆運動」について
（3）　第2テーマ「1848年の革命における労働運動——社会史の方法論的問題——」について
（4）　エピローグ

（1）

1971年9月12日午前11時，スカンジナヴィア航空機ボーイング747は，小雨のなかを，羽田を飛び立った。モスクワ経由のコペンハーゲン行きである。はじめて，外国に向う誰しもが感ずるように，不安と期待の入りまじった複雑な感慨がたえず襲いつづける。間もなく隣席に坐った外国人の紳士と話をしはじめたが，きわめて流暢な英語を話す。彼は A. P. von Rosenstiel 氏といって，オランダ，デルフト市にある化学研究所の研究員だそうで，大阪での国際学会の帰りだということであった。氏の専攻は，Quantitative Electron Probe Microanalysis of Oygen で，専門の話しはよくわからないが，ダンツィヒ市の生まれのドイツ人であり，"Danzig is the city of tragedy" というと，非常に感慨深げに，第1次大戦後のドイツ・ポーランド問題などを話し出し，コペンハーゲンまでの時間を彼氏と過し，退屈におちいらずにすむことができた。ここでリンツの会議でのドイツ文の挨拶を，彼に文法的な誤りを訂正し，流麗な文章にしてもらう機会をえたのは幸運であった。

モスクワ，コペンハーゲンを経由して，9月13日の午後，ウィーンにつき，ここで一泊，翌14日午後，リンツについた。アムステルダムの国際社会史研究所で Hilferding を研究しておられる日本社会事業大学の倉田稔氏，および都立大学の城座和夫氏，それにヨーロッパ留学をはじめられたばかりの関東学院大学の浅井啓吾氏も後から参加され，日本人グループができ上った。Hotel Wienerwald に荷物をおき，早速，会場の Jägermayorhof を訪ね，議長の Dr. Rudolf Neck さん，Prof. H. Steiner さんに会い，来意をつげ，日本学術会議代表として，挨拶をする機会を与えてほしいというと，Dr. Neck は快諾され，秘書の Herrin Stein をよんで筆者の挨拶文をタイプ印刷にし，一部を渡してくれた。みるとほとんど原文のままであるが，ただ一ヶ所，「日本学術会議代表として」というところが，「外国人代表，とくに日本学術会議代表として」（im Namen der ausländischen Delegation und besonders der Delegation der Japanischen Gesellschaft für die Wissenschaften）となっている。そこで Neck さんに，「これは少しおかしいのではないか」と訊ねると，「いくつもの国の代表が挨拶をする必要もないので，貴君がひとりで全部を代表してやってくれ」という。これにはおどろいて「それは自信がない」と何度も強調したのであるが，「大丈夫だから，やってくれ」といってきかない。こうして筆者は，9月16日のリンツ市長招待の午さん会のきらびやかな Hotel Cassino の大広間で，日本学術会議だけでなく，日本はもちろん，ヨーロッパの約20ヶ国の代表の名において，挨拶をするという，まことに光栄ある役割をあたえられた。Prof. H. Steiner 氏をはじめ，Dr. Rudolf Neck 氏，そして秘書の Stein 夫人の示された御好意を，わたくしは永久に忘れることはできないし，ドイツ語も充分でない筆者にたいして，出席者の皆さんが払って下さった心づかいに今もなお深く感謝している。

9月14日の晩は，顔合せの晩さん会で，きわめてくつろいだ雰囲気のながに食事がはじまる。日本人グループはそれぞれ別れて席をとり，両隣りの出席者と挨

拶を交わし，自己紹介をして，研究テーマや所属の研究所や大学のことなどを話し合う。朝・昼・晩3食とも，会場の食堂で食事をともにするので，いろいろな人と会う。大体，大学教授というような肩書きの人は比較的少なく，各国の研究所の若い研究者およびライブラリアンが多い。たとえば，ウィーンにある「オーストリア抵抗文書研究所」（Dokumentationsarchiv des Österreischen Widerstandes—Altes Rathaus, Wien 1., Wipplingerstrasse 8, A-1010, Österreich.）は，この国際労働運動歴史家会議の本部がおかれている関係もあり，多くの研究者やライブラリアンが参加していた。Prof. H. Steiner さんも Dr. R. Neck さんもこの研究所の所員のようである。そのほか，ウィーン大学付属の現時代研究所（Institut für Zeitgeschichte der Universität Wien—A-1090 Wien, Rothenhausgasse 6）があり，Dr. Anton Staudinger が出席しておられた。そのほかウィーンからは，ウィーン労働者および職員室（Kammer für Arbeiter und Angestellten in Wien—Wien 4, Prinzeugen Strasse 20-22）の社会科学のライブラリアンであるハッツル氏（Herr. Gottfried Hatzl），所属はよくわからないが，コナリー氏（Herr. Helmut Konari），また抵抗文書研究所のエグゼンベルガー氏（Herr. Herbert Exenberger）など，オーストリアの参加者は，さすが地元だけにきわめて多い。Hatzl 氏だったか，Konari 氏だったか忘れたが，——多分 Hatzl 氏だと思うが——筆者と，オーストリアと日本の生活条件などの比較について話していたが，たまたまかの有名な「金融資本論」の著者 Rudolf Hilferding の息子さんが，現在 Wien に居ることを話された。倉田稔氏は，たまたま Hilferding をテーマにオランダの国際社会史研究所で研鑽をつづけられているので，その場ですぐ倉田氏を紹介させていただき，倉田氏は会議のあと，Wien に赴き，Hilferding 2世に会い，貴重な想い出話しをきくことが出来たばかりか，父 Hilferding の書簡などを贈られたという。その後，Amsterdam で倉田氏にお聞きしたところでは，見知らぬ東洋の若い研究者がはるばる Wien まで訪ねてくれたことにいたく感激し，いろいろと歓待し，談たまたま父 Hilferding の運命にふれると，涙を流さんばかりに激昂して語ったという。周知のように，Hilferding は，オーストリア出身ではあるが，後にドイツに帰化し，ウァイマール共和国時代のドイツ社会民主党の理論的指導者であった（これについては，服部英太郎「ドイツ社会政策論史」(上)，未来社，1969年，服部英太郎著作集第1巻参照）。しかしオーストリアではドイツ人であるとして忘れられ，ドイツ連邦共和国では，社会民主党から，マルクス主義者として敬遠されているという現状のなかで，倉田氏の訪問は意外であるとともに嬉しかったにちがいない。倉田氏の話をアムステルダムでききながら，筆者は，亡命先のフランスでナチス官憲の手に捕えられ，前途を絶望して自殺した（ナチスに殺されたという説もある）このマルクス主義者の悲惨な運命に想いをはせたものである。それはともかく，これは倉田さんにとって大きな収穫であったろうし，こうしたことも ふくめて，倉田氏の Hilferding 研究に深く期待したいと思う。

そのほか，ウィーンの労働運動史協会（Verein für Geschichte der Arbeiterbewegung—1081 Wien, Abertgasse 23, Tel. 420486）の編集者ハーリッカ氏（Herr. Ernst K. Herlitzka）にも会ったが，うっかりして，どういう雑誌を出しているのか，聞きもらしてしまった。ドイツ語の知識の不充分さを痛感した次第である。そのほか所属はわからないが，ミッテルエッカー氏（Herr. Hermann Mitteröcker）はフランス労働運動史の専攻だそうで，フランス語で話しかけられ大変困惑するという場面もあった。

ドイツからは，筆者の接した限りでは，ベルリン自由大学付属のフリードリッヒ・マイネッケ研究所の「ベルリン歴史委員会」（Historische Kommission zu Berlin, beim Friedrich-Meinecke-Institut der Frein Universität Berlin——1 Berlin 45, Tietzenweg 79, tel: 730361）のビーエルゲルト氏（Herr. Biergert），ドイツ連邦デュッセルドルフの連邦幹部会（DGB—Bundesvorstand, Düsseldorf——West-Deutschland——Düsseldorf-Oberkassel. Niederkasseler Kirchweg 118）のシュスター博士（Dr. Dieter Schuster）である。残念なことに，ドイツ民主共和国の方々とは話す機会がなかったし，フランスの方々とは，筆者のフランス語がきわめて不充分なため，交歓することができなかった。

そのほか，コペンハーゲン大学の歴史研究所のクリスティアンソン氏（Herr. N. F. Christianson, Kopenhagen Univ. Historisches Institut），オスロの労働運動史料研究所（Archiv der Arbeiterbewegung）のアルネ・コックヴォル氏（Herr. Arne Kokkvoll），ルーマニアの「社会および政治科学アカデミー」「労働運動史研究家のフックス教授（Herr. Prof. Simon Fuchs, Historiker der Arbeiterbewegung, Akademie für Gesellschafts- und politische Wissenschaften, S.R. Rumänian, Centrül de stünte sociale Tirgu-Mures. str. Bolyai nr. 17），フィンランドのパス

ィヴィルタ氏 (Herr. Juhani Passivirta, Dr. Phil, Prof. der modernen politischen Geschichte an der Universität Turku, Turku Finland), ソヴェートのヤブロニッキー博士 (Dr. Josef Jablonický, Historický ústav SAU, Bratislava Klemensova 27, CSSR), ブルガリアの共産党史研究所のコィヴカ・カヴェヴァ女史 (Yivka Kaveva, Institut für Parteigeschichte, Sofia, Bulgarien) などで，そのほかにもまだ多くの人と話したのであるが，名前と顔が一致しないので，これ以上あげるのは遠慮させていただくこととする。結局ヨーロッパおよびアメリカの21ヶ国と日本の代表，約130名が出席して，リンツ第7回大会は始まったのである。

（2）

第1テーマ「1914年以後の大衆運動」については，6個の報告が行われた。まず第1に Dr. Hans Hautmann (Institut für Neuere Geschichte und Zeitgeschichte) ——Österreich, Die Massenbewegung der Österreichischen Arbeiterschaft in den Jahren 1917 und 1918 (ハンス・ハウトマン博士——オーストリア——)「1917年から1918年までの年代におけるオーストリア労働者階級の大衆運動」についてその問題点を紹介しよう。

報告者はまず，第1次大戦末期のオーストリアにおける大衆運動を問題にするにあたって，1914～16年の時期に，オーストリアのプロレタリァートが，何故に，「ほとんど完全な受身の状況」(in fast völliger Passivität) にあったかという問いにたいして，その原因は党および労働組合指導部の機会主義的な域内平和策にあり，またフリードリッヒ・アドラース (Friedrich Adlers) を先頭とする左翼社会民主主義者は，こうした党の主脳部にたいする批判に，労働者大衆の強大な力を動員することを意識的に怠ったからだというのである。[(1)] そして1917年の春を境に，労働者階級の経済的状態は悪化して耐えがたいものとなり，これに抵抗するために，さまざまな形で抵抗が行われ，それとともに，抵抗の形態として，「単純なストライキ」("einfacher Streik")，「ゼネラル・ストライキ」("Generalstreik")，「大衆ストライキ」("Massenstreik")，「大衆行動」("Massenaktion")，「自然発生性」と「意識性」("Spontaneität" und "Bewusstheit") が問題となったという。

つぎに報告者は，戦争中のオーストリア労働者の状態にふれ，一方において専門的熟練労働力の深刻な不足と，他方広はんな失業の存在という矛盾した状況のなかで，名目賃金はたしかに上昇し，たとえば金属労働者の場合，1914年に比べるならば，60～80パーセントも上昇し，軍需産業であれば，100パーセントも上昇するということも珍しくなかった。しかし，週労働時間もまた53時間から70時間あるいはしばしば80時間に達したといわれる。[(2)] また肉や脂肪，卵，ミルクなどが300パーセントから1,000パーセントも価格が上昇し，しかも団体交渉機能が停止するという危機のなかで，これに抵抗する大衆運動の気運が濃厚にもり上ってきたのである。

報告者は，マルクス=レーニン主義の立場から，「『ストライキ』と『大衆運動』との関係が，マルクス主義の立場からも，あるいは改良主義によって特徴づけられた労働者の組織によっても，その理論の中心に据えられたことはなかったとして，その理論的な関係について明らかにする必要があるとして，問題をつぎの4つに整理するのである。すなわち，

第1の要素として，ストライキたとえば，ゼネラル・ストライキと大衆運動との間には，「質的差異」(qualitativen Unterschied) が存在する。

第2の要素として，大衆ストライキ (Massenstreik) は，階級主義に目ざめた，進歩的な労働者階級の堅い核を中心に，未組織のプロレタリア，農民，小市民の一部そしてしばしばブルジョア的な中産階級の共感をえて行われる。従って，大衆運動 (Massenbewegung) の成果は，「可能な限り深く根を下した階級意識と結びつく労働者階級の可能な限り広はんな組織化である」というのである。

第3の要素として，単純なストライキの通常な手段とは異なり，大衆運動には，経済闘争と政治闘争が結びついており，政治闘争が第一義的な意義を担っていることである。すなわち，ストライキはいつでも可能であるが，大衆運動には特殊な情勢が必要であり，階級闘争の尖鋭化という情勢 (eine situation verschärften Klassenkräfte) が必要である。

第4の要素は，「ゼネラル・ストライキ」と「大衆運動」の区別が問題である。前者は，いわば，「より低い」("niedrigere" Stufe) であり，ほとんどつねに現

注(1) Dr. Hans Hautmann, Die Massenbewegung der Österreichischen Arbeiterschaft in don Jahren 1917 und 1918. S. 1.

(2) Ibid., p. 3.

存制度の枠内にとどまるものである。すなわち，労働組合を中心とする来るべき危険にたいする労働者階級の防衛的な手段 (Defensivmittel) である。ところが，これにたいして，大衆運動は「より高い」段階 ("höhere" Stufe) であり，革命的でない政党はこれを歓迎しないし，自然発生性が強く発現する。それは，ある一定の目的を達するための労働者階級の攻撃的手段であり，現存の制度は疑問をもってみられ，根底から震憾させられるのである。[(3)]

以上のように，Generalstreik と Massenbewegung との関係を整理したのち，報告者はこの両者は別々に純粋な形で現われるものではなく，たとえば1920年のカップ一揆のように，ゼネラル・ストライキが大衆運動のなかにふくまれる場合も少なくない。大衆行動は，現存のブルジョア的な階級国家における労働者階級の最高の影響力の大きい闘争の質的側面である。要するに，ゼネラル・ストライキはより意識的であり，大衆運動は，むしろ自然発生的である。ところで問題は，「自然発生的な」大衆が，「意識的に目ざめた」党よりも客観的にみて革命的であることがある。ここに革命をめぐる戦略戦術のむずかしい問題があるのであって，報告者が，これをつぎのように整理しているのは教訓的である。

These	—Anti-these—	Synthese
(General) Streik	Massenbewegung	Ergreifung der Macht
"Bewusstheit"	"Spontaneität"	"Bewusstheit"

つぎに，ドイツ民主共和国 (DDR) の代表，ウォルフガンク・ルーゲ氏 (Wolfgang Ruge) は，「1917年から1920年および21年までの大衆運動と政治的諸勢力」と題する報告を行い，そのなかで，ロシア革命と大衆運動との関係を強調し，いかなる場合にも，オーストリア・ハンガリア帝国の崩壊，ドイツ11月革命，ハンガリア・ソヴェート共和国，東部および南部ヨーロッパにおける新しい民族国家の建設はもちろん，ここであつかわれる範囲を超える問題である中国，インド，トルコおよびアラブ諸国における民族的・革命的な運動も同じく，ロシアにおける革命的な事件にふれることなくしては考えられないことであるという観点から，問題を発展させていく。そして，大衆運動の新しい質 (Qualität) の目標として，つぎの4つをあげるのである。すなわち，(1)帝国主義の克服と社会主義の達成のために，非プロレタリア的大衆をひきつけることによって，社会主義革命を国際的規模におしひろげる異常に発展した労働者階級の力，(2)労働者階級の先進的役割と，それによって実現される革命的な党の存在，(3)新しい，とくにプロレタリア的な闘争の形態，生産手段の管理をめぐる闘争を，生産手段の社会化のための要求と結びつける政治ストライキ，武装デモンストレーション，武装蜂起，赤衛軍の建設，(4)ソヴェートの建設，以上の4つの目標をあげるのである。

そして，ロシア革命の発展と経験が，大衆運動が充分に発展したドイツ，未だ充分に発展するに至らなかった東ヨーロッパ，とくに労働者階級の力の弱く，一部に革命的農民が少数ながら存在するという条件のなかで，どのように学ばれたかをのべている。その場合東ヨーロッパ諸国では，ブルジョア的な要素によって彩られた民族解放運動が異常な役割を果し，ロシア革命は，そのような雰囲気のなかでうけいれられたこと，従って，そのためにバルカン諸国では，大衆運動は，急速に退潮期に入ったことが指摘されている。また同じく大衆運動としても，イギリスは日和見主義，イタリアのそれは，本質的に経済的な目標に限定されたものである点を強調しているが，しかしこの評価は，大いに問題であろう。

つぎに，ユーゴースラヴィアの「国際労働運動研究所」の研究所員，ウラダン・パンティッチェ博士 (Dr. Vladan Pantić) の報告「1917年から1920年までのドイツ労働者階級の革命的闘争の形態としての労働者協議会」である。この報告は，従来のドイツ労働者協議会の革命的昂揚を強調し，ともすれば，その失敗についての客観的な分析を怠りがちな傾向にたいし，きわめて分析的な報告を行ったものとして注目に値する。報告者はまず，「ドイツにおける協議会運動および社会主義運動の失敗の原因は何であったか」という根元的な問題を提起し，ドイツにおいて，(1)果して協議会制度および社会主義運動のため客観的および主観的な諸条件は存在していたか。(2)ドイツにおける協議会運動は，ロシア革命の模倣の試みであったのか，それともそれ自体として固有の特別な成立および発展の原因はあったか，(3)そしてもしあったとするならば，ドイツにおける協議会運動は，本来何を提示したのであろうか。また(4)ドイツにおける協議会運動の実践と理論の意義はどこにあったか。およそ以上のような重大な問題提起を行い，これらに答える形で問題を展開して

注(3) Ebendort, S. 7.

いるのが印象的である。

まず第1に，報告者は，ロシアにおけるソヴェート運動ともまたイギリスのショップ・ステュアートとも異なるドイツの協議会運動は，第1次大戦以前に，その歴史的・イデオロギー的先駆者をもっていないこと，従って，この運動の進展に際して，前衛政党も充分に明確な認識とプログラムをもちえなかったことが強調される。すなわち，1917年4月，ストライキ委員会という形での革命的労働者協議会が，最初の組織として建設されたとき，それは，SPDや自由労働組合にたいする大衆の不満の表明であり，また SPD や自由労働組合は，レーテ運動をおそれたのであった。報告者は，1919年1月までのレーテ運動の主要な特徴を，つぎのように要約する。(a)労兵会議は，憲法制定国民議会建設までは，国家支配の出発点であり基礎であった。だがそれは，議会主義的民主主義の諸勢力との闘争過程において，事実上，ますます，古い国家機構や軍事指導の利用のための，その優先権を喪失した。(b)レーテの組織の未成熟と経済上のレーテ制度の同時並行的な建設がおろそかにされた。(c)レーテにおける選挙制度の不統一，(d)レーテは，何らかの大衆運動組織の支持をもたなかったし，反対に，ＳＰＤ，自由労働組合および独立社会民主党の大部分は，レーテ制度に反対の態度をとった。(e)レーテ制度の支持者たちは，組織的に弱く，組識やレーテの課題について，どのような明確なプログラムの概念をももっていなかったことである。

つぎに1919年2月以後の レーテ運動展開の 第2期について分析的にのべ，レーテ運動の本質を，(1)議会主義反対，(2)既成政党にたいする反対，(3)労働組合にたいする反対，(4)経営における労働関係の官僚的・位階的性格にたいする反対などのさまざまな側面においてとらえ，それによって，ドイツにおけるレーテ運動の本質を明らかにしようとしている。

つぎに，ルーマニアの社会主義ルーマニア共和国社会および政治科学研究所の主任研究員，シモン・フックス教授 (Prof. Simon Fuchs) の報告「1917年から1918年にかけてのルーマニアにおける労働運動の国際的側面」("Die Internationalen Aspekte der Arbeiterbewegung in Rumänien in den Jahren 1917-1918) および，フィンランドのテュルク大学の政治史研究所 (Institut für Politische Geschichte Universität Turku) のジュアニ・パースィヴィルタ氏 (Juhani Paasivirta) の「1918 年内乱までのフィランドの 労働運動の初期の歴史」(Die Frühgeschichte der Arbeiterbewegung Finlands bis zum Bürgerkrieg des Jahres 1918) の2つの報告がつづく。前の3つの報告が，オーストリアおよびドイツを対象としていたのにたいし，この2つの報告は，従来とり上げられることの少なかったこの2つの国において，第1次大戦後の労働運動がどのように発展したかを追求したものである。これらの報告については，いくつかの重要な問題提起もなされたのであるが，第2テーマについて紹介する関係上，割愛させていただくこととする。

（3）

第2テーマ「1848年の革命における労働運動——社会史の方法論的問題」については，9月17日9時からはじまった。まず最初に，ウィーンの「オーストリア抵抗文書研究所」のルドルフ・ネック氏の「1848年の革命期におけるヨーロッパ労働運動」からはじめられた。氏はまず，1948年の革命が，ドイツおよびハップスブルグ王朝の支配の下にあった中部ヨーロッパの場合には，ブルジョア階級の力の前に絶対主義勢力が譲歩を約束させられた出発点であり，労働運動の本格的な発展の時期を画するものであることを指摘したのち，社会史的にみて，1848年の革命は，つぎのような問題が，特別に研究に値するものとしてあげている。

1) まず第1に，専門語および社会史の定義の問題，たとえば同時代史史学にあらわれるプロレタリァート——労働者階級——労働運動 (Proletariat——Arbeiterschaft——Arbeiterbewegung) という用語の区別の 問題がある。一般にこうしたすべての問題は，なぜかこの史学においては貧弱であり，このことは，労働者という概念に たいして比べるとき，たとえば，小農民 (Kleinbauern)，小手工業者および商業および自営業者というような階層の定義は貧弱である。

2) それゆえ，このことと関連して，現代社会における階級概念，階級形式および社会階層というような概念についての検討。

3) オーストリアにとっては，産業革命は，まだほとんど完全に封建的な社会であったために，特殊なものであること。

4) 若いプロレタリァートの意識形成の問題，貧民の役割および労働者階級の周辺の理解の試みの必要，運動および組織および自覚，意識および社会的実在。

5) 1848年の事件についての労働者階級の役割の研究に際しては，社会的運動から歴史的な橋わたしへの

連続性の問題。1848年以前および以後の労働運動の役割。

以上のような問題提起が行なわれたのであるが，これを機会に，筆者も翌日，短い意見発表を行なったのであるが，これについては最後にふれることにしよう。

つぎに，ウィーンのフリードリッヒ・フォーグル氏 (Friedrich Vogl) が，「1848 年ウィーン革命の 自由の詩」(Die Freiheitdichtung der Wiener Revolution 1848) という興味ある報告を行なった。この報告は，1848年，パリに勃発したフランス2月革命のドイツおよびオーストリアにたいする影響，その結果として次第に昂まってくる革命的興奮のなかで，作られた詩の紹介を中心としたものであり，労働者の運動はもちろん，こうした革命詩人にたいするハップスブルグ家の検閲の強化のなかで，ハインリッヒ・ハイネ，ルードヴィッヒ・ヴァン・ベートーヴェン，フランツ・リスト，ヨハン・ネポムーク・ヴォーグル，フライリッヒグラース，フライヘル・ラザリニなどの多くの詩人たちの，ウィーンにおける革命的蜂起における影響および役割についてのべた。われわれ日本人にはよく理解できないことではあるが，詩をつくること，詩をうたうことが，日常の精神生活のなかで重要な意味をもっているヨーロッパでは，革命的精神の昂揚にとって詩の果す役割がいかに大きかったかを理解することができよう。

つぎに，ハンガリアの ギエルギー・スピラ博士の「姉妹都市，ペスト，オッフェンおよびアルトッフェンにおける 1848 年革命の労働運動」という報告が行なわれたが，大衆的な労働運動の舞台ともいうべき3つの姉妹都市において，1848年の革命がどのように発展したかを事件史的に物語ったものである。これらの町は，のちに，ブタペストとして統一され，ハンガリーの首都となるのであって，1848年革命が，これらの諸都市においていかに労働者階級の運動——たとえば，ツンフト的な手工業職人，仕立職人，蹄鉄工，錠前工および印刷工などの労働条件改善の要求や陳情運動と結びついていたことを指摘している。

最後にイタリア，フィレンツェのエルネスト・ラジオニエリ氏 (Ernest Ragionieri) とシモネッタ・ソルダニ (Simonetta Soldani) によって「イタリアにおける1848年～49年革命における労働者，農民および国民」という共同報告がなされた。イタリアの場合，1848年の革命当時，階級分解は未だ不徹底であり，階級としてのプロレタリァートの形成がおくれたため，革命を推進する主体的勢力とはなりえず，厳密な意味での労働運動は存在しなかった。しかしそれにもかかわらず，この革命の経験と，その結果は，イタリアの労働運動がその誕生の時から，決定的に帯びざるをえない性格をもたらしたのである。すなわち，1849年以後，イタリアにおける労働組合運動の萌芽は，サルディニア王国において発展の萌芽を見出したのであった。イタリアの自由主義的＝ブルジョア的政党はその援助の下に，憲法の制定を通じて，将来のイタリア統一の主導的な力として組織されたのであった。こういう前提の下で，報告者たちは，つぎのように結論する。イタリアの歴史家たちによって，しばしば注目されずに終ることは，一貫した姿で，1848～49 年の ヨーロッパ革命の失敗を生き長らえたものは，イタリアの民主的な政党であったことであり，このことこそ，国民的なプログラムにおいて，社会的な要因が本質的に従属的な地位にくみこまれ，相互扶助的なそして労働組合的な組織が圧倒的に愛国主義的な機能をもって設立されたのであるといわれる。しかし，イタリアの労働運動が非常に強い政治的な影響をうけ，この影響が最初から，純粋に職業的な諸契機よりも政治的な諸契機の優越性のなかにあらわれ，その伝統がその後も長くつづいたのは，1848～49 年の革命における 国民大衆の，直接もしくは間接の指導を獲得しようとする闘争から生じたのであるというのである。

以上，2つのテーマを中心として，報告の概要を，ごく簡潔に整理してみたが，みられるように，「1848年の革命と労働運動」にかんする 第2テーマの 報告は，理論的・分析的であるよりは，むしろ事実説明的であり，「方法論について」という副題にも かかわらず，理論的な整理が充分でないような気がした。とくに，1847～8 年の革命を考える場合に見逃すことのできない恐慌については，主報告者も，その後交々起って発言したコメンターも言及するところがなかった。ドイツ語の会話能力の不充分な筆者には，よくわからなかったが，少なくともそのような印象をうけた。そこで筆者は，Dr. Neck さんが，「君は意見がないのか，東西両ドイツの研究状況のちがいなどについては，討論でやってくれ」といわれたのを想い出し，16日の夕食のあと，「明日，"allgemeine Krise" を中心として，1848 年の革命について，英語で意見をのべたいが，宜しいか」と訊ねると，「結構だから，是非やってくれ」と快諾されたので，すぐホテルに帰り，一夜づけで原稿を準備し，17日の午前，概略つぎのような報告を5分間ほど行った。即席に近いものであり，多くの

不正確な表現が含まれているかもしれないが，御参考までに，その全文を掲げよう。

Sehr geehrter Vorsitzender!

Unsere Tagung ist international, und gestatten Sie mir zu sprechen auf Englisch.

———•———•———•———

Ladies and Gentlemen!

I would like to present to you some problems about the revolution of 1848 as an economist.

As Herr. Dr. Rudolf Neck mentions in his summary of report, the revolution of 1848 is the great changing point in the history of Europe. But it is necessary to remark that the essentials of this revolution must be found in the establishment of world capitalism. In other words, the rise of the industrial bourgeoisie and the appearance of working classes, and as the result, class-struggle took shape of the violent labour movement.

On the other hand, the economic crisis went beyond the national bound and spread out over the whole industries of the main European countries. The meaning of this revolution is found in the fact that the development of capitalism gave rise to the world-scale economic crisis.

What kind of relations between class-struggle and economic crisis? This is a very important problem. Why the revolution of 1848 occurred at that time? It is not only intimately connected with the economic crisis,but with bad harvest of crops owing to an unseasonable weather. I want to say that the causes of the revolution were not simple, but so complicated and must be observed from the social, economical and political points of views.

The outbreak of February revolution in France and its influence on Germany and Austria appeared as the mass movement for political democracy. It was the effect of the establishment of the world capitalism. Because, the cotton industry of Britain had predominant influence in the world market, and France, Germany and Austria were given a great shock by the economic crisis. Handicraftsmen and home-spun cotton workers of European countries were deprived of the meaning of living and spontaneously rushed into revolutionary uprising. It is said that the revolution was not the uprising by modern proletariat, but the movement of half-starved and half-independent handicraftsmen, pauper peasant and desmestic industrial workers. The bourgeoisie took advantage of revolutionary uprising of masses. Accordingly the revolution of 1848 was the first great event that a crisis directly changed into a revolution. But it must be remem-bered it was surely the first and the last revolution that the economic crisis brought about the revolution.

Marx and Engels' theory of revolution was based on the process of this revolution. They thought that revolution could not be realized without the economic crisis, but the history of European economy declined their assumption. In brief, the revolution of 1848 was the first bourgeois revolution that the economic crisis was changed into revolutionary uprising. But many revolution thereafter did not advance on the same course. And so, Marx and Engels was obliged to revise their theory of revolution. In this sense, the revolution of 1848 has the greatest significance in the modern history. Danke schön!

（4）

なお，最後に蛇足ではあるが，9月16日，リンツ市のホテル「カッシーノ」で催されたリンツ市長招待の午さん会における挨拶文をも掲載することを許していただきたい。これは，外国人出席者代表および日本学術会議代表として，招待への感謝と日本におけるヨーロッパ労働運動研究の状況にかんたんにふれたものである。筆者が，このスピーチをなしえたのは，ひとえに，筆者の稚拙なドイツ文に手を入れて下さった畏友中央大学教授島崎晴哉氏および前記 von Rosenstiel 氏の御好意によるものである。

Sehr geehrter Herr Bürgermeister!
Meine sehr geehrten Damen und Herren!

Es ist mir eine Ehre und Freude, Sie im Namen der ausländischen Delegation und besonders der Delegation der Japanischen Gesellschaft für die Wissenschaften zu unserer Internationale Tagung der

Historiker der Arbeiterbewegung in Linz begrüssen zu dürfen.

Ich freue mich, dass in dieser grössten bisher in Europa stattgefundenen Internationalen Tagung der Arbeiterbewegung, als ein am Studium der Europäischen Arbeiterbewegung interessierter japanischer Forscher, Gelegenheit haben zu können, vornehmlich die Tendenz der Forschung der Österreichischen und Deutschen Arbeiterbewegung eingehend kennenzulernen.

Die grossen progressiven Traditionen der Österreichischen und Deutschen Arbeiterbewegung werden in Japan unter den gesellschaftlichen und ökonomischen Bedingungen unseres Landes sorgsam beobachtet und vielfältig studient. Nach dem Zweiten Weltkrieg sind dabei auf diesem Gebiet bereits beachtliche japanische Leistungen vollbracht worden.

Vornehmlich wurden viele Klassiker der europäischen Arbeiterbewegungen ins Japanische übersetzt, zum Beispiel Marx/Engels Gesammelte Werke, Franz Mehrings Werke, Rosa Luxemburgs ausgewählte Werke, und so weiter. Auch Studien zur Geschichte der Arbeiterbewegung wurden in den letzten drei Jahren ins Japanische übersetzt.

Nach dem Zweiten Weltkrieg entwickelten japanische Arbeiterbewegungen ein ausserordentliches Tempo, und die Zahl der organisierten Arbeiter beträgt bereits mehr als zehn Millionen, wobei ihre Gewerkschaften jedoch nur geschlossen in einem Betrieb organisiert wurden. Und so sind sie nicht vollständig in der Lage, gemeinsam Beschlüsse durchzusetzen und nicht stark genug für eine Förderung der internationalen Arbeiterbewegungen.

Ich hoffe, dass diese Tagung dazu beiträdazut, der Forschung der internationalen Arbeiterbewegung in Japan to dienen.

Am Ende meiner Begrüssung möchte ich nicht versäumen, im Namen der Delegierten der Japanischen Gesellschaft der Wissenschaften und der ausländischen Delegierten herzlich für die freundliche Aufnahme zu danken, die wir hier in Österreich gefunden haben.

Unsere besonderer Dank gilt der internationalen Tagung der Historiker der Arbeiterbewegung, der Stadt Linz und allen Personen und Institutionen, die uns bei der Teilnahme unterstutzt haben. Ich wünsche dieser Tagung einen erfolgreichen Verlauf und danke für Ihre Aufmerksamkeit.

この簡単な報告を終るにあたり，筆者に，この有意義な学会出席の機会をつくるのに努力して下さった小池基之，遊部久蔵両先生にまず深く感謝致す次第である。また，リンツ行きの決定について，お骨折り戴いた京都大学出口勇蔵教授，平井俊彦教授をはじめとして，経済学史学会の幹事の諸先生および社会政策学会幹事の諸先生方，とりわけ，中央大学島崎晴哉教授，日本学術会議員，水田洋教授および塩田庄兵衛教授には大変お世話になったことを申しのべさせていただきたい。そのほか，昨年度，リンツ会議の出席者甲南大学の山口和男教授からは大変有益な助言を賜わったこと，また会議出席にかんしては，先方との連絡その他について，高橋幸八郎教授に一方ならぬお世話を戴いたことをも記し，感謝の気持をあらわしたい。

——1971・12・11　深更——

（経済学部教授）